

すべてが真剣勝負！ めざすは法曹界

法律家としての技術と
心を磨く場

私たち編集員が教室に入ると、教授を
Uの字に囲んだ形で、緊張した雰囲気の
なかすでにゼミが行われていました。人
数は20人程度。渥美東洋教授の「刑事訴
訟法」ゼミです。

この渥美ゼミは、3年次・4年次の2

年間を通して行われます。刑事司法上に
起る、様々な問題を取り上げ、捜査段
階から裁判確定までの過程を具体的に分
析し、評価しながら解決方法を考えてい
きます。

ただ単に条文を読むのではなく、個人
の自由を確保するための法について、ま
た、個人の自由、生命や財産を奪う犯罪
に適切な措置を取り、なおかつ刑事裁判
であっても人の自由を保障し、誤判のな
いようにするにはどのようにすればいい
のかなど、そこに介在する欠点を改善し
ていくよう理論と実際の双方に注目しつ
つ議論を進め、活発な討論を2年間重ね
ています。

法律家の第一歩は
「尊敬できる友人をもつて」

このゼミを擁する中央大学法学部法律
学科は、だれもが知るよう、英吉利法
律学校を前身に100年余りの歴史と伝
統をもつ、日本の法曹界の一翼を担つて
います。そしてこのゼミは、全法曹界の
人間の1パーセントを輩出しているとも
いわれている大御所。

渥美ゼミを選択する学生のほとんどが、
法律家をめざしているだけに、もちろん
挑む姿は真剣そのもの。個人の自由を守
る法律家としての心を身につけることが
なにより要求されます。

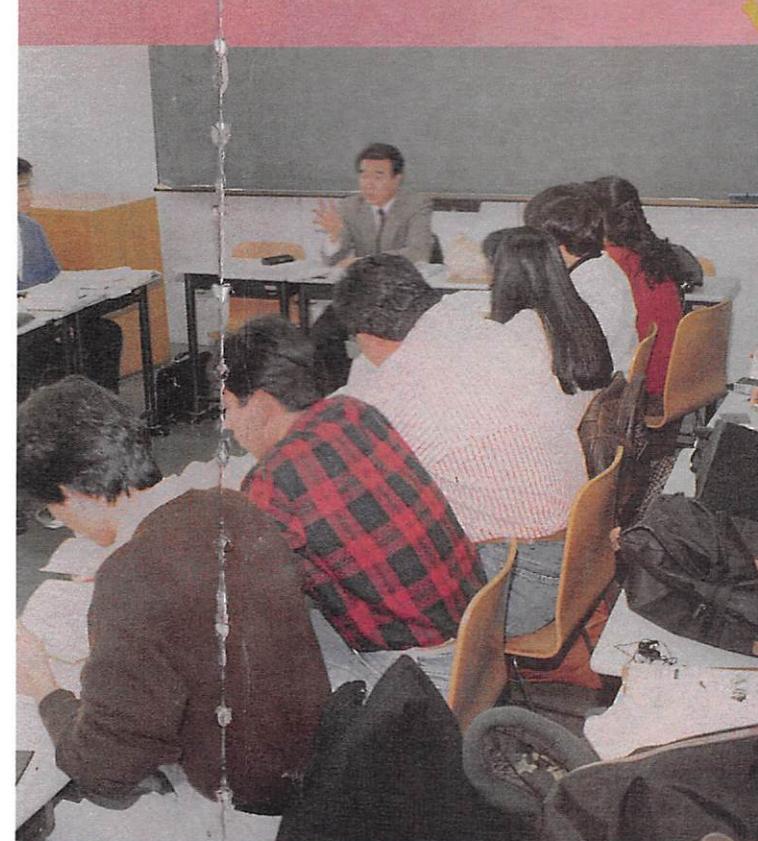
「隣の人を尊敬できる人間にになれ」「自分
勝手な知識でなく、『知的』になること」と
いう言葉が、教授のもうはらの自癖と
か。

3年次では基礎づくり、
4年次ではより実際的に展開

中央大学法学部法律学科では、教授の
指導のもとで特定分野を深く掘り下げる
学習ができるよう、3年次から専門ゼミ
が始まります。開講数は100近くにも
なります。

『訴因制度』『迅速な裁判』など、また
証拠班であれば、『伝聞法則』などのテー
マを司り、興味をもち、自

いわゆる大学受験のための語学や、高
校での授業ではなく、外国の文献を読み、
解釈することを司り、興味をもち、自



走れ！研究室

プロフィール

中央大学法学部 涩美 東洋教授

1935年生まれ。中央大学法学部卒業。中央大学教授、立教大・学習院大を歴任して慶應義塾大学講師。現在、司法試験考査委員。専門は刑事法、とりわけ刑事訴訟法。著書は『刑事訴訟法』『捜査の原理』(有斐閣)、『刑事訴訟を考える』(日本評論社)、『レッスン刑事訴訟法』上・中・下、『米国刑事判例の動向』I・II(中央大学出版部)その他。



渥美ゼミの場合は、3、4年次で各募集を行うことになりますが、一般的には3年次に履修した学生が、そのまま4年次も履修する形になっています。

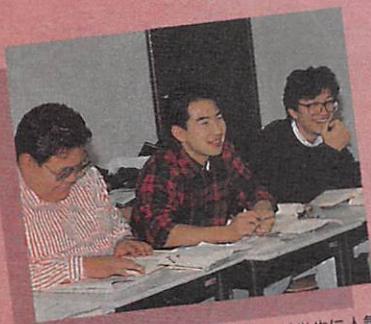
入室にあたっては、筆記試験が課せられます。試験内容は、『憲法における司法上の権利・司法制度』について。それに約20人が決定します。

入室が決まると、ゼミが始まる前にまず取り上げる問題を選択。3年次の基礎ゼミでは、刑事訴訟のテーマを捜査、公判、証拠の三つに分けて、グループ分けを行い、各自が1年間、そのグループの中で取り上げるテーマを一つ決めて、研究していくことになります。

例えば、捜査班であれば、「逮捕・拘留」、捜索・押収など、公判班では、

法学部に進もうとする高校生に対して、渥美教授いわく、「外国の書物を数多く読むこと」。

最近は「静か」な傾向
積極的な学生を求む



人生観を交えたパワフルな講義が学生に人気

「訴因制度」、「迅速な裁判」など、また、証拠班であれば、「伝聞法則」などのテーマが決まります。

その研究内容を毎回一人のレポーターが発表。その発表内容から、質問や討論などが行われます。教授の指導は厳しく、レポーターでなくとも、常に発言の機会があるので、自ら勉強していないと立ち遅れたり、深く追究できないことは言うまでありません。

そのため、ゼミは週1回ですが、いわゆる「サブゼミ」というのが、学生同士で自主的に行われます。発表者のレポートを、同じグループ内の人たちと、理論構成や裏付け、問題点などを意見交換、検討し、ゼミに臨むことになります。

ときによつては、毎日のように研究室に遅くまで残つて取り組むことは当然のこと、普連のゼミと比べてみても、だいぶハードということがいえるかもしれません。

さらに、4年次の応用ゼミではこうしたことを見出し、それを発展させ、取り上げる判例は、年間百数十項目になります。

「ゼミはいろいろな意味でダイナミック。高校のように答えというものがなく、問題意識をもち、とことんつきつめなればなりませんが、先生の熱意や友人との話し合い、すべてが真剣勝負で、理論、技術だけでなく、心まで学ぶことができます」

いわゆる大学で騒のための言葉や、高校での授業ではなく、外国の文献を読み、様々なことに目を向け、興味をもち、自ら考え判断することが必要ということ。

また、現在、渥美教授の研究は「個人主義の復権」と話されます。東西艦広く取り組んでおり、この問題に関しては、アメリカやイギリスではかなり進んでいますが、日本では軽視されているともおっしゃいます。

最後に、ゼミ生の1人、3年生の鈴木秀洋さんに、ゼミの魅力を語ってもらいました。